
2500、彼女と私の時間。

市川かうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2500、彼女と私の時間。

【Nコード】

N0360N

【作者名】

市川かうた

【あらすじ】

重いのならば捨ててしまえ。いいえ、これは私の望む重みなので。彼女は笑い、自分を見上げる。

何も形に残らないのであればわざわざ形にすることはないのではないだろうか。

形にしようと躍起になり、それが自身をも追い詰めるのであればそんなものはさっさとどぶにでも捨ててしまえばいい。

好きだといって、楽しいといって、していたことが自分の首に食い込み頸動脈を食いちぎろうと暴れるのをむざむざ黙ってみている必要はない。

必要がないのだから捨ててしまえばいいのだ。けれどもそれはそれでさびしいと、彼女は言う。

みんなが私を必要としてくれることがうれしいので、たとえ私は自身の首がちぎれようと無理を致そうと思います。

それを紡いだときの彼女は嬉しそうでもあったが同時に誰よりも辛そうに微笑んでいた。

他人のために何かするという行為が楽しいのか、他人に尽くすことが好きなのか、と問えば、彼女は大きくかぶりを振る。

私はみんなが私を必要としてくれているのを見るのがすきなのです。みんなのためではなく、私がすきだから致すことなのです。

彼女の首は今にも折れそうに細くなっている。首を絞めることも折ろうと図ることもなく、頭の重みでばかりと折れてしまいそうにはなかった。

そんなことをしたって、君の手元には何も残りはしないというのに、どうして彼女はそんな薄汚いぼろきれのようなものを大事そうに抱え上げるのだろうか。

そのぼろきれのせいで彼女の首は絞められ、ゆっくりと彼女の生きる力を奪っていつていくというのに。

他人が喜ぶことが嬉しいのか、と聞けば、彼女はまたかぶりを振る。

いいえ、いいえ。私はみんなが私を必要としてくれていると、私にはその価値があると思えることが大事なのです。たとえそれで私が押しつぶされようと、みんなには関係のないこと。心配も同情も哀れみも要りませぬ。そんなものは、私を愚弄していると思えぬのです。

そういったときの彼女の瞳はまるで切り裂かれるかと思うほど冷たい色をしていて、けれども同時に切ない色を帯びていた。

心配も同情も哀れみも要らない。その言葉はおそらく本当であつて、けれどももうそなのだろう。

彼女は自分ができることで他人が自分を必要としてくれるさまを見るのが楽しいといった。だからこれは、私のためにしていることなのだと。

彼女がそういうのだから、私は彼女が大事そうに大事そうにそれを抱えるさまを見届けるしかない。

その腕は驚くほど痩せ細り、白い手のひらはかさつき、爪は割れて血をこぼす。

このままでは彼女は壊れてしまう。いますぐに、ではないが、壊れてしまう。私が見ている目の前で、ぼろきれを大事そうに抱えたまま。

どうしてそのようなことをするのだろう。君を必要としてくれるのなら別に、友達でも、家族でもいいではないか、と訝しく思っていたのが顔に出ていたのか、彼女は私を見上げたまま唇を吊り上げた。

あなた様には分からないことでしょう。私が望んでいるのは馴れ合いでも依存でもないのです。そんなもので必要だと思われるも私は嬉しくありません。だって、それは私の力ではありませんぬもの。

蹲る彼女を見下ろして、私はつぶやく。家族が君を必要としてい

るのは、友達が君を必要としているのは、君との付き合いを楽しんでいるか。友達が君を必要としているのか。楽しいと思わせたのは、君の力ではないのか。

私がこんなことを言うのは珍しいことなのか、彼女は私を見上げてくすくすと笑った。

私の力ではありません。それは、人の力です。ひと、という生身の人間を見たときの、常識的な意味での「必要」です。ひとはひとをないがしろに出来ません。けれども、自分に危機が迫ったときはいとも簡単に私を手放すことでしょう。ほづら、ひとにとって、私は必要ではないのですよ。

彼女のこげ茶色の髪がばさりとゆれる。その髪は決して美しくないわけではないのに、彼女の今の状態がその色をくすんで見せた。

——レンガ道に立ち止まり、路地裏で彼女を見下ろす。なんとも、——私にとっては——異様な光景であった。

ふう、とらしくもなくため息を吐き、私は黒いフードをゆつくりと下ろす。

それで、君は、必要とされるために、それを持っているのか。

ええ、その通りです。人は私を求めなくとも、これを求めて私を必要としてくれます。もつとほしい、もつとほしいと。それが、私には嬉しくてなりません。たとえ私が死に絶えようとも、どこかの

だれかのところには私が在るのです。私を、いいえ、これが必要と
してくださる人のところに、私はいるのです。

だから君は、私を見ても、自分の命よりそれを守ろうと、してい
るわけだね。

私の言葉に、彼女はにつこりと微笑んだ。これから、近いうちに
必ず死んでしまう人間とは思えない笑みを浮かべていた。

私はなんだか馬鹿らしくなってしまつて、同じように笑みを返し
て、私は彼女にさよならを告げることにした。

もういいよ、私にはこれ以上君といても君を理解できそうにない。

ふふ、そうですか？ それでは、

彼女がゆつくりと立ち上がり、くすんだこげ茶色を揺らして、ふ
わりと微笑んだ。

—— また、近いうちにお会いいたしましょう。

私を見たというのに、彼女は最後まで怯えることなく（仮に、怯
えたとしても、自分が死ぬことに、ではなくあれを失うことに対し
て、だ）笑顔で私の前から去っていった。

遠くなつていく背中を眺めながら、私はため息をこぼして、フー
ドをかぶりなおす。

そうして、彼女と同じように、踵を返して歩き出しながら、ぼん
やりと思つた。

彼女の大事な、あれ。一週間後、彼女が死ぬその日に新刊として
発売されるそれを、私も一度読んでみたいと。読んでみたら、彼女
のいう「必要」が分かるかもしれない、と。

ただまあ、生き物ではない自分では、そんじょそこらのものより
は醜悪な自分では、それに触れようとした瞬間に表紙が腐り落ち、
文字が逃げ出してしまつたろう。

だけれど、彼女はどうせこちらへ来るのだ。

そのときに、彼女に読んでもらえばいい。聞かせてもらえばいい。

あんなにも自分の書いてきたものを大事に抱える彼女ならば、き
つと、一語一句間違えず空で教えてくれることだろうから。

そうして私は、帰り支度を済ませたあと、ゆっくりと冥府への扉

を押し開けたのだった。

（後書き）

唐突に浮かんだものでしたので、推敲もいたしておりません。

つたないものをお見せして申し訳ありませんが、この小話があなたの心に何か残せたら嬉しゅうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360n/>

2500、彼女と私の時間。

2010年10月10日04時43分発行